

2011年4月3日(日)

「森聞き」監督：柴田昌平さんとのコーヒータイムに参加して

鹿児島純心女子高等学校 廣尾理世子

…映画を観た後に、「この感動を誰かと共有したい」「今の気持ちを誰かに伝えたい」、という気持ちになる。その心そのままにおしゃべりする場を作りたい、という柴田監督の温かい配慮から実現した企画です。

参加者は12名だったと思います(途中でジェフリー・アイリッシュさんと2人のお子さんが参加して、15名に)

偶然、カフェで、同僚の有馬先生(「森聞き」に登場する高校生、河合和香さんの元先生)にあって誘われた、このコーヒータイム。

実は、私はまだ「森聞き」を観ていなかったのですが、だから面白かった。

つまり、参加した方一人一人が、「自分なりの『森聞き』」を感じていて語っている、それがよくわかりました。もし、私がすでに「森聞き」を観ていたなら、自分の中の「森聞き」の物語にこだわって、フラットな状態では、他の方のお話を伺うことができなかつたんだろうな、と感じました。

一人一人の「森聞き」。それは、ご本人たちが今どんな生活を送っているのか、また、そこで何を感じているのか(興味を持っていること、抱えている問題、ちょっとした悩みなど)を反映させた「物語」を、映画の中に読みとって、そこに寄り添っているわけです。

有馬先生だったら、河合和香さんの物語。

お子さんとの関係に悩んでいる人は、その原因を作ったのは自分かも…とちょっぴり苦い反省の物語。

感動を言葉にすることに難しさを感じている人は、それができる高校生のまぶしさを感じる物語。

何かを実現することに悩んでいる人は、勇気をもらうための物語。

違う文化や自然のあり方に引かれる人には、導きとしての物語。

もしかしたら、この会そのものが、一つのドキュメンタリー作品なのかもしれない。途中でそう感じ、わくわくしながら参加しました。3時40分に始まって5時に終わったから、上映時間80分のドキュメンタリー映画「『森聞き』と私」とでも名付ければいいのでしょうか。

なんて、勝手なことを妄想しました。

それにしても「さすがだな」と思ったのは、柴田監督は実に上手に話し手を指名していたことです。すべての人に等しく…と見せて、実際は「言いたいことがあふれている」人を見抜いて、話を引き出す。そして溢れすぎそうになると、さりげなく流れを変えていく。相手の話に耳を傾けているからこそ

できることなんでしょうね。そして、自分の「森聞き」だけにこだわっていない、ということかもしれません。誰かが言っていたけど、「作品は観てもらって初めて完成するのだから、作者だけものではない」。監督が他の方の話に耳を傾けることができるのは、その言葉に通じる部分があるかもしれません。（びっくりしたのは、監督が指名しなかったのは、私を含めて「森聞き」を観ていない2名だった、という事実。プロはすごいね。顔でわかるのかな？）

「自分は転校生だったから、帰属する場所がなくて不安だった」という柴田監督。大学時代のフィールドワークで、教授から指示されていたインタビューは行わず、ひたすらおばあちゃんたちの畑仕事を手伝いながら、その話に耳を傾けたという経験がもたらしたものは、とても大きかっただろうな、とうらやましく感じました。「転校生」は、観察する人というポジションを強いられる存在です。どこかで自分が主人公になりきれない、というのは、若い時にはなかなかやっかいなことに思えますが、おばあちゃんたちとの日々を通して、「観察者」に徹しきれなかった自分、主人公にはなれなくても、少なくとも何かに「参加」した自分を発見したことは、とても大きな喜びだったのだろうな、と感じました。

「中学生の娘のことがよくわからないから、高校生を対象にしてみた」という制作秘話も面白かったです。それを聞きながら、ちょっと思い出したのが、宮崎駿監督が「千と千尋の物語」を撮った理由。「千尋と同年齢のガールフレンド？がたくさんいるんだけど、彼女たちが喜ぶような作品を作ってみようとした」。一見正反対のように見える

言葉ですが、どこか通じるものがある感じです。それはさておき、「森聞き」を柴田監督が撮ったのは、娘さんというちょっと手強いミュージックのおかげだということで、私たちは娘さんに感謝しなければいけませんね。

さて、最も印象に残った言葉が「人間はそう簡単に変わるものではない」「簡単にわかって欲しくないから、感動的に見える成長のエピソードをあえて入れなかった」。どん、とききました。一筋縄ではいかない、いいなあ、このスタンス。「森聞き」ますます観るのが楽しみになってきました。

そういえば、有馬先生があその後、「河合和香ちゃんは、実は聞き書きレポート、結構やつつけ仕事で出したんですよね」って言ったのがとてもおかしかった。河合和香ちゃんのスタンスもグッジョブ！です。高校生って、そういうところがあります・・・

おやおや、私も、すっかり自分の物語として、今回の「コーヒータイトム・ドキュメンタリー」を観てしまいました。

終わり